

2025 年 11 月 20 日

明治学院大学 国際センター

学生の海外派遣の成果の検証

本学の学生の海外派遣事業について、2024 年度「大学留学プログラム」に関して以下の通り報告いたします。

◇対象学生：2024 年度春学期もしくは 2024 年度秋学期より、大学留学プログラム（全学部学科生が参加可能な全学の海外留学プログラム）に参加して、長期留学を実施した学生

◇派遣人数：79 名

◇派遣期間：2024 年度春学期もしくは 2024 年度秋学期より、1 学期～2 学期

◇派遣目的：長期認定留学として本学の学業の延長上にある留学

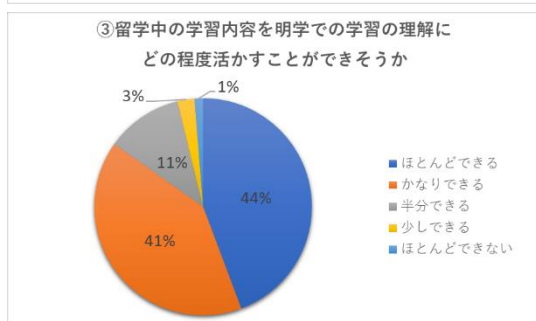
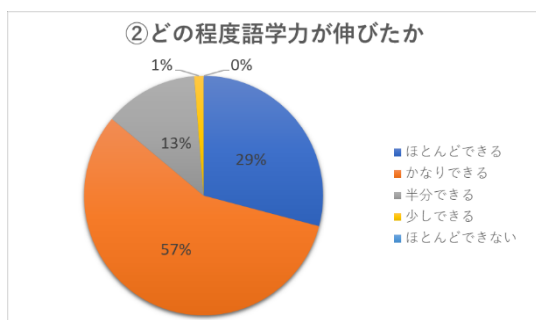
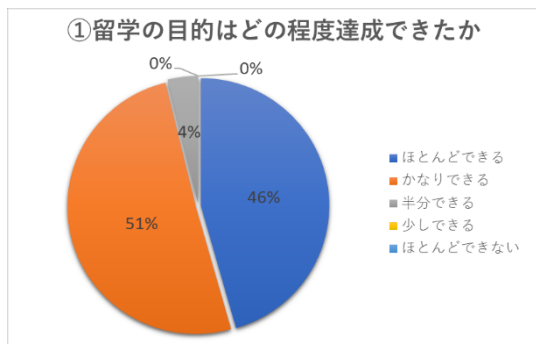
◇活動内容：大学留学プログラムは以下の 4 種類からなる。

- 交換留学、派遣留学：協定大学での学習
- グローバルキャリアインターンシップ：協定大学での学習および
現地企業でのインターンシップ（就業）活動
- 国際貢献インターンシップ：国際協力に関わる海外国連事務所
NPO、NGO などでのインターンシップ（就業）活動

以上の学生に対し、オンラインアンケートを用いて留学後に留学の目的の達成状況に関する 3 つの項目について自己評価を学生に課し、その結果を回収しました。また、自身の能力や特性に関する 10 個の項目について留学前後の自己評価を学生に課し、その結果を回収しました。回答の回収は、留学前は 2023 年 12 月～2024 年 6 月に、留学後は 2024 年 12 月～2025 年 8 月にかけて行い、有効回答数は 79 件、回収率は 100%でした。以下に回収したアンケートの分析を記載します（以下、割合は％表示での小数点以下を四捨五入して記載。文中の％値は集計データの数値を使用しているため、グラフ内の％表記とは異なる場合がある）。

■留学の目的達成状況に関する設問について：

留学後のみに回答を求めている、①『留学の目的はどの程度達成できたか』、②『どの程度語学力が伸びたか』、③『留学中の学習内容を明学での学習の理解にどの程度活かすことができそうか』という 3 つの設問については、各設問とも 95%以上の学生から「ほとんどできる」、「かなりできる」、「半分できる」という肯定的な回答があった。



設問①『留学の目的はどの程度達成できたか』

は、「ほとんどできる」を選んだ学生が 46%、

「かなりできる」が 51%、「半分できる」が 4%

となり、「少しできる」、「ほとんどできない」の

回答はそれぞれ 0%であり、全ての対象学生全

員から肯定的な回答があった。設問②『どの程

度語学力が伸びたか』については「ほとんどで

きる」を選んだ学生が 29%、「かなりできる」

が 57%と一番多く、「半分できる」が 13%とな

り、全体の 99%の学生が語学力の伸びを実感し

ている。また、「ほとんどできない」と回答した

学生が 0%であった。設問③『留学中の学習内

容を明学での学習の理解にどの程度活かすこ

とができそうか』は、「ほとんどできる」を選ん

だ学生が 44%、「かなりできる」が 41%、「半分

できる」を選んだ学生が 11%となり、全体の

96%の学生から肯定的な回答が得られた。

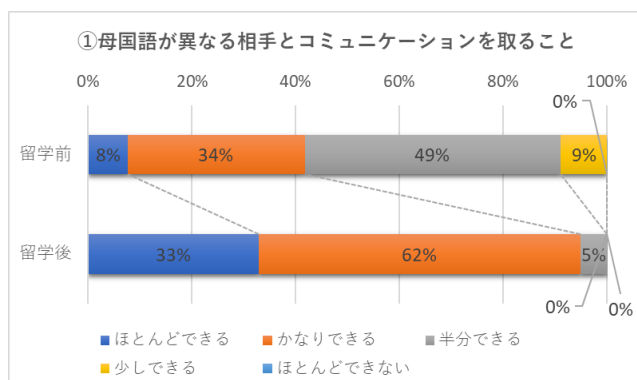
学生たちが目的意識と留学への意欲を高く

保ち、前向きに取り組み、各自留学の目的を達

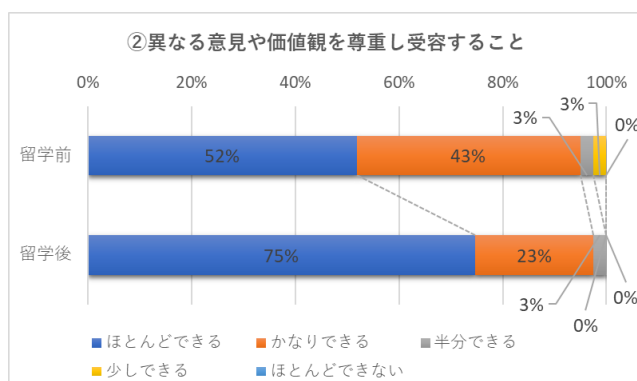
成した学生が大半を占めたことを評価してい

る。

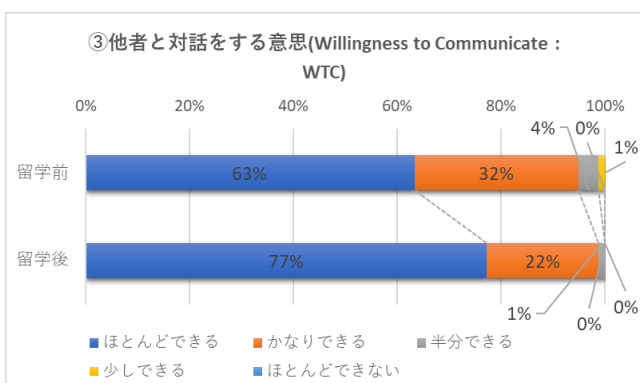
■留学前後の自己評価 設問①～③について：



の自己評価から 1 段階以上成長した学生の割合も全設問の中で最高の 71%となり留学をと
おして大幅な成長がみられる結果となった。これは留学中に学生自身の語学力が伸びたこ
と、母国語が異なる相手とコミュニケーションを取らざるを得ない留学先の環境により、実
践力が付き自信につながったことが大きいと考察する。



内だけでなく、寮やアパート、ホームステイなどの居住場所でも常に異なる価値観を持った
人々、文化に囲まれて生活することによりもたらされた結果と推察する。



①『母国語が異なる相手とコミュニケーションを取ること』で、留学前は
「ほとんどできる」、「かなりできる」
を選択した学生が 42%であったが、留
学後には 95%にまで上昇した。留学前
後の回答を比べて、留学後には 100%
の学生が「半分できる」以上の自己評
価をしており、全設問の中で一番成長
度が高かった。またあわせて、留学前

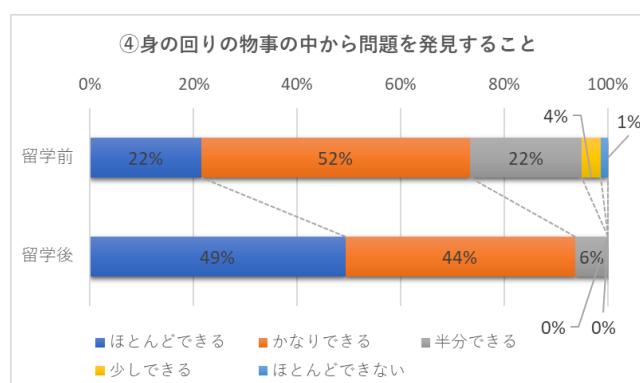
②『異なる意見や価値観を尊重し受
容すること』は、留学前でも「ほとん
どできる」と「かなりできる」と選択
した学生が全体の 95%と高水準だっ
たが、「半分できる」、「少しできる」と
いう回答も見受けられていたのに対
し、留学後は概ね全ての学生が「ほと
んどできる」、「かなりできる」のい
ずれかの回答をしている。留学先で大学

③『他者と対話をする意思
(Willingness to Communicate : WTC)』
についても、留学前に「ほとんどでき
る」、「かなりできる」と回答した学
生は 95%となり、留学前の全設問の中
で最高の割合であった。また、留学後
に「ほとんどできる」、「かなりでき
る」を選択した学生の割合は 99%とな
り、

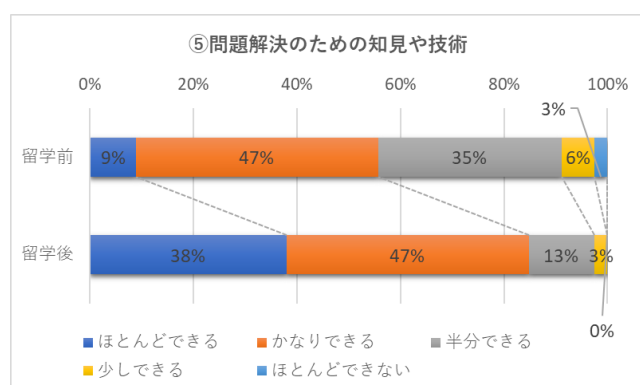
設問①～③の中では最も高い水準となった。

②『異なる意見や価値観を尊重し受容すること』と③『他者と対話をする意思(Willingness to Communicate : WTC)』という 2 つの設問に対する、留学前、留学後両方のアンケートにおける「ほとんどできる」、「かなりできる」の回答率の高さは、留学を志す学生の資質として持ち合わせていることが期待される項目であることが影響していると考えられる。

■留学前後の自己評価 設問④～⑥について：



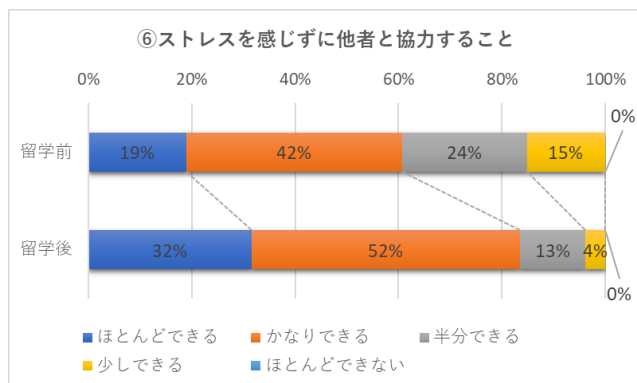
④『身の回りの物事の中から問題を発見すること』がどれくらいできるかという設問については、留学前は「ほとんどできる」、「かなりできる」を選択した学生が 74%であったが、留学後には 93%にまで上昇した。また留学前には「少しできる」と回答した学生が 4%いたが、留学後には 0%となり、全ての学生から「ほとんどできる」、「かなりできる」、「半分できる」のいずれかの回答が得られる結果となった。初めての親元を離れての生活、初めてのルームメイトとの寮生活、初めての海外での授業など、多くの“初めて”にあふれる環境において、これまでは気が付かなかったことに目が向くようになり、様々な問題を発見できるようになったのではないかと推察する。



④『身の回りの物事の中から問題を発見すること』がどれくらいできるかという設問については、留学前は「ほとんどできる」、「かなりできる」を選択した学生が 74%であったが、留学後には 93%にまで上昇した。また留学前には「少しできる」と回答した学生が 4%いたが、留学後には 0%となり、全

⑤『問題解決のための知見や技術』の設問は、留学前は「ほとんどできる」、「かなりできる」の回答は 56%と過半数を超える結果であった。しかし、留学後には「ほとんどできる」、「かなりできる」の回答が 29 ポイント上昇し 85%を占め、「半分できる」が 13%となった。また、留学後の自己評価が 1 段階以上アップした学生の割合は 61%

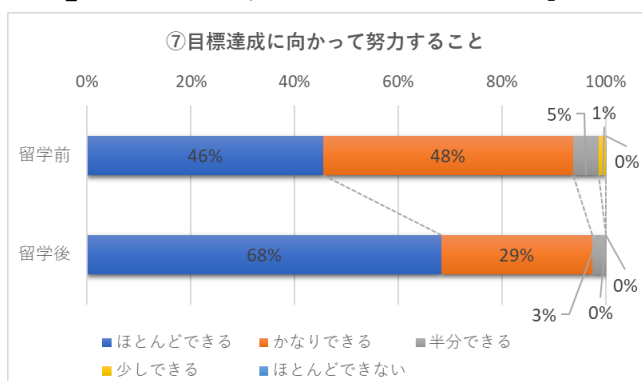
となっている。これらの結果から、留学により、日本での生活に比べ勉強面や人間関係において様々な問題に直面したことが考えられ、その都度問題を発見し、問題に対して真摯に向き合い、解決に努め知見を深める学生が多くいたことが推察される。



⑥『ストレスを感じずに他者と協力すること』に関する設問については、「ほとんどできる」、「かなりできる」と回答した学生が、留学前の 61%から留学後は 84%に上昇、「半分できる」と回答した学生は留学前の 24%から留学後は 13%と減少したことから、ほとんどの学生が成長を感じていると言える。②『異なる意見や価値観を尊重し受容すること』に関する設問で、ほとんどの学生が留学後には「ほとんどできる」、「かなりできる」と回答していることを受けて、他者との交流をする上で、たとえ自身と違う意見や価値観があったとしても、それを受け入れた上で相手を尊重できるようになったことが推察され、⑥『ストレスを感じずに他者と協力すること』においても留学後には自然と「ほとんどできる」、「かなりできる」が増えたのではないかと考えられる。しかし、一方で、「少しできる」という回答は、留学前後で変化がなかったことから、一部の学生においては留学前にあまり意識することがなく生活していたが、留学によって他者との関わりについて考える場面が増える中で、新たに気がついたり、意識したりせざるを得ない状況に置かれ、多少なりともストレスを感じる場面があった可能性が考えられる。

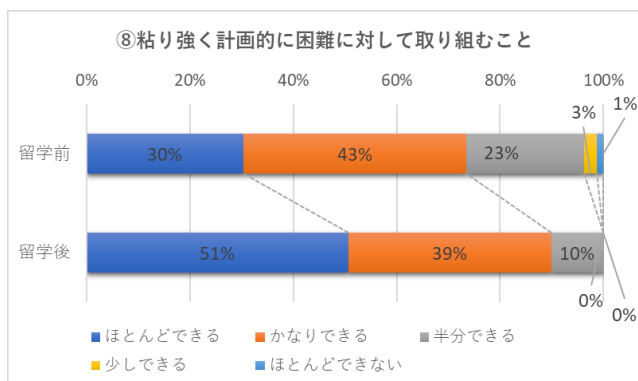
■留学前後の自己評価 設問⑦～⑧について：

⑦『目的達成に向かって努力すること』、⑧『粘り強く計画的に困難に対して取り組むこと』という設問に対しては、留学前の回答ですでに比較的高い評価が得られており、⑦『目的達成に向かって努力すること』には 94%、⑧『粘り強く計画的に困難に対して取り組むこと』には 73%の学生が「ほとんどできる」または「かなりできる」を選んでいる。



⑦『目的達成に向かって努力すること』については、「ほとんどできる」と回答した学生が、留学前の 46%から留学後には 68%に上昇し、⑧『粘り強く計画的に困難に対して取り組むこと』については、「ほとんどできる」と回答した学生が留学前の 30%から留学後には 51%に上昇した。

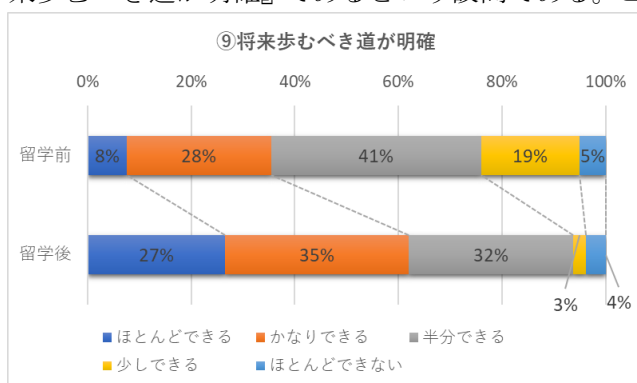
この調査に回答している学生は大学留学プログラムという国際センターで主催している



留学プログラムに出願した学生であり、その多くはプログラムごとの学内選考試験を通過し、留学先が求める条件を満たしたり、留学先の選考を通過したりすることができた学生であるため、留学前の時点で「目標達成に向かって努力」し、「粘り強く計画的に」取り組んできていると言える。

■留学前後の自己評価 設問⑨～⑩について：

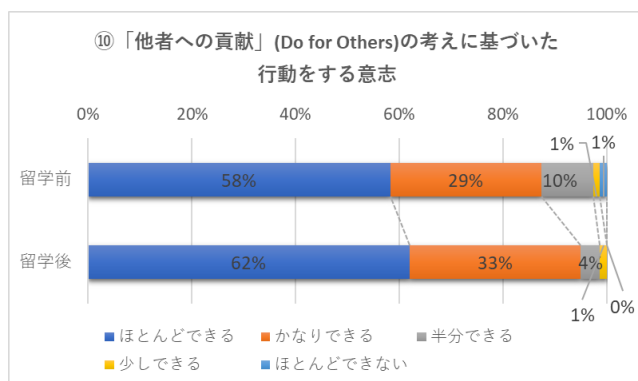
留学前と比較すると数値の上昇は見られるものの、回答にばらつきが見られたのが⑨『将来歩むべき道が明確』であるという設問である。この設問には留学前の回答で「ほとんどできる」または「かなりできる」を選んだ学生が 36%、「ほとんどできない」や



「少しできる」を選んだ学生は 24%に上り、留学前に低評価をしている学生が一番多い設問であった。留学後の回答では「ほとんどできる」または「かなりできる」を選んだ学生が 62%まで上昇し、「ほとんどできない」が 4%に

なったものの、「少しできる」を選んだ学生はまだ 3%おり、他の多くの設問のように「少しできる」と「ほとんどできない」が 0%に近づくほどの減少は見られなかった。留学前から具体的なキャリアプランを持っている学生もいる一方で、明確なプランを持っていない学生もいるということが明らかになった。他の設問の回答とは異なる傾向となったことについては、留学することで当初考えていた道とは違う道が見えてきたことにより、今後の進路の選択肢が増え、迷いが出た学生や、年次が上がり就職活動などに直面して将来の決定を迫られる場面が増えてきた学生もいるのではないかと考察する。

⑩『「他者への貢献」(Do for Others)の考えに基づいた行動をする意志』については、学生生活の中で本学の教育理念「Do for Others」に触れる機会が多い影響か、留学前の回答

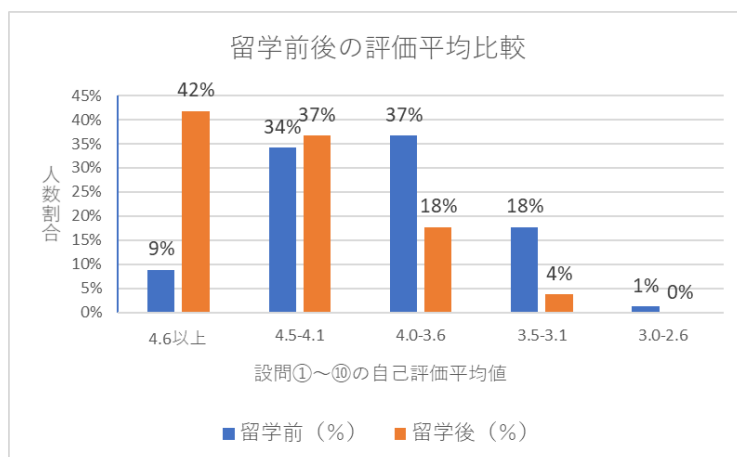


で「ほとんどできる」または「かなりできる」と回答した学生が87%に上った。留学後の回答では「ほとんどできる」または「かなりできる」を選んだ学生は95%へ増加した。留学前に「半分できる」と回答していた学生が「かなりできる」、「ほとんどできる」という回答に変化したことが確認できる。

多くの学生が本学の教育理念を念頭に留学先で他者と関わりを持つことができたことが見て取れる結果となった。

■留学前後の設問①～⑩の自己評価平均について：

今回の調査で学生が自己評価を行った選択肢を5段階評価で「ほとんどできる」=5、「かなりできる」=4、「半分できる」=3、「少しできる」=2、「ほとんどできない」=1と設定した。対象者全員の留学前と留学後の設問①～⑩に対する回答を5段階評価に当てはめ、学生一人あたりの回答の平均値(小数点第二位で四捨五入)を算出した。その値を以下のグラフに示した。



留学前は自己評価の平均値が4.6以上の学生は全体のわずか9%に留まっていたが、留学後には42%にまで上昇した。また、平均値が4.5-4.1の学生は留学前の34%から留学後は37%まで上昇し、自己評価の平均値が4.1以上になる学生は、79%に上った。3.5-3.1の学生においては留学前の

18%から留学後は4%に減少、さらに3.0-2.6の学生は留学前の1%から留学後は0%になったことから、全学生が留学後に自己評価平均値を底上げすることができたことが分かる。それぞれの設問において、学生によって評価の違いはあるものの、「ほとんどできる」と「かなりできる」の留学後の評価の割合はすべて上昇しており、学生たちの留学の成果・成長度を感じられる結果となった。

この調査を実施するにあたり、学生の異文化間コミュニケーション能力、分析力、外国語能力、キャリアデザイン力、共生社会への貢献について留学前後の成長を測ること想定し設問を制定した。調査結果を総合的に比較すると、異文化間コミュニケーション能力や分析力、外国語能力については顕著な伸びがみられた。共生社会への貢献については、留学経験に関わらず本学の学生の特徴として意識が高い傾向が見られたが、留学によってさらに成長する学生が多かった。キャリアデザイン力については、留学をきっかけにより明確なプランを持つことができた学生がいる一方で、迷いが生じる学生も見られ、個人差が大きい傾向となった。この点に関しては、出発前にキャリアを意識したイベントを開催したり、キャリアセンターに協力を依頼し出発前のオリエンテーションで学生に意識づけを行ったりするなどの機会を提供し、今後改善を図りたい。

以上

担当： 国際センター 国際交流課